

クラスタ機能利用の手引き



Job Director
R16

-
- Windows, Windows Server, Microsoft Azure, Microsoft Excel, Internet Explorer および Microsoft Edge は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - UNIX は、The Open Group が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。
 - HP-UX は、米国 HP Hewlett Packard Group LLC の商標です。
 - AIX は、米国 IBM Corporation の商標です。
 - Linux は、Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - Oracle Linux, Oracle Clusterware および Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
 - Red Hat は、Red Hat, Inc. の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - SUSE は、SUSE LLC の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - NQS は、NASA Ames Research Center のために Sterling Software 社が開発した Network Queuing System です。
 - SAP ERP, SAP NetWeaver BW および ABAP は、SAP AG の登録商標または商標です。
 - Amazon Web Services およびその他の AWS 商標は、Amazon.com, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標です。
 - iPad, iPadOS および Safari は、米国およびその他の国で登録された Apple Inc. の商標です。
 - iOS は、Apple Inc. のOS名称です。IOS は、Cisco Systems, Inc. またはその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標であり、ライセンスに基づき使用されています。
 - Docker は、米国およびその他の国で登録された Docker, Inc. の登録商標または商標です。
 - Firefox は、Mozilla Foundation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
 - UiPath は、UiPath 社の米国およびその他の国における商標です。
 - Box, boxロゴは、Box, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。
 - その他、本書に記載されているソフトウェア製品およびハードウェア製品の名称は、関係各社の登録商標または商標です。

なお、本書内では、R、TM、cの記号は省略しています。

本マニュアルでは、製品名およびサービス名を次のように略称表記しています。

略称	製品名・サービス名
Office	Microsoft Office
Excel	Microsoft Excel
Azure	Microsoft Azure
Internet Explorer	Internet Explorer 11
Firefox	Mozilla Firefox
AWS	Amazon Web Services
EC2	Amazon Elastic Compute Cloud
EBS	Amazon Elastic Block Store
S3	Amazon Simple Storage Service
ELB	Elastic Load Balancing
CloudFormation, CF	AWS CloudFormation
CloudWatch, CW	Amazon CloudWatch
RDS	Amazon Relational Database Service
Glue	AWS Glue
Lambda	AWS Lambda
EKS	Amazon Elastic Kubernetes Service
ECS	Amazon Elastic Container Service
STS	AWS Security Token Service
CloudWatch Logs	Amazon CloudWatch Logs
SNS	Amazon Simple Notification Service

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウェア）は、外国為替令に定める提供を規制される技術に該当いたしますので、日本国外へ持ち出す際には日本国政府の役務取引許可申請等必要な手続きをお取りください。許可手続き等にあたり特別な資料等が必要な場合には、お買い上げの販売店またはお近くの当社営業拠点にご相談ください。

はじめに

本書は、クラスタ関連機能および操作方法について説明しています。なお、本書内に記載されている画面例と実際の画面とは異なることがありますので注意してください。

本書の内容は将来、予告なしに変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

1. Job Director R16.1における制限事項

Job Director R16.1と各マニュアルにおける制限事項を以下にまとめました。各マニュアルにおいて以下の制限事項・非対応機能に該当する記述が存在した場合、本項の内容を優先してください。

■ Job Director R16.1の機能制限について

- 1つのJob Director MG/SVに登録できるジョブネットワーク数は、最大で50件です。
- ジョブネットワーク1件について、配置できる単位ジョブの上限は50個までです。
- 複数のJob Director MGを使用してジョブを管理することはできません。
- 対応言語は日本語のみです。英語、中国語には対応していません。
- NQSフレームボタンおよび、NQSフレーム画面は使用できません。



NQSフレーム画面に含まれる「キュー一覧」および「リクエスト一覧」は、マネージャフレームの「マシン一覧」から対象のマシンを選択して開くことで表示できます。

- UNIX OS(HP-UX、AIX、Solaris)には対応していません。
- IPF(Itanium Processor Family、IA-64)には対応していません。
- クラスタソフトウェアはCLUSTERPROおよび、Windows Server Failover Cluster(WSFC)に対応します。
HP Serviceguardおよび、IBM PowerHA、Oracle Clusterwareには対応していません。
- SAPの各サービスとの連携機能には対応していません。
- WebOTX Batch Server(WOBS)との連携機能には対応していません。
- iOS、iPadOS、Safariには対応していません。
- コンテナ環境での動作は対応していません。
- ACOSとの連携および、ACOS監視機能には対応していません。
- SUPER-UXおよび、SUPER-UX NQSとの連携には対応していません。
- WebSAM SystemManager Gとの連携機能には対応していません。
- Micro Focus Operations Manager softwareおよび、OPCMMSG連携機能には対応していません。
- UCX Singleジョブ機能には対応していません。

■ マニュアル内のバージョンの表記について

- 本製品以前に一般販売されたJob Directorは以下のバージョンのみです。本製品(R16.1)および、下記のバージョン以外は提供していません。マニュアル内における製品バージョンを限定した記載については、指定されたバージョンの範囲にこれらのバージョンが含まれている場合のみが該当します。
 - Job Director R12.10
 - Job Director R13.2
 - Job Director R15.1

- Job Director JD Assistをご利用になる際、Job Director MG/SV が対応する動作モードは以下のとおりです。

動作モード	対応Job Director MG/SVバージョン
Definition 3.0	Job Director MG/SV R12.10
Definition 5.0	Job Director MG/SV R13.2
Definition 7.0	Job Director MG/SV R15.1
Definition 9.0	Job Director MG/SV R16.1

■ マニュアルで使用される画像について

- マニュアル中で使用されている画面画像について、実際の画面と異なる場合は、実際の表示を正として読み替えてください。

2. マニュアルの読み方

- 本バージョンにおける新規機能や変更事項を理解したい場合
→ <リリースメモ>を参照してください。
- Job Director を新規にインストール、またはバージョンアップされる場合
→ <インストールガイド>を参照してください。
- Job Director を初めて利用される場合
→ <クイックスタート編>を参照してください。
- Job Director の基本的な操作方法を理解したい場合
→ <基本操作ガイド>を参照してください。
- 環境の構築や各種機能の設定を理解したい場合
→ <環境構築ガイド>を参照してください。
- Job Director の操作をコマンドラインから行う場合
→ <コマンドリファレンス>を参照してください。
- Job Director の運用方法を理解したい場合
→ <運用・構築ガイド>を参照してください。
- 運用中のJob Director を新環境に移行する場合
→ <移行ガイド>を参照してください。
- クラスタ環境で運用中のJob Director をバージョンアップする場合
→ <クラスタ環境でのバージョンアップ・パッチ適用ガイド>を参照してください。
- その他機能についてお知りになりたい場合
→ 関連マニュアルの内容をお読みいただき、目的のマニュアルを参照してください。

3. 凡例

本書内での凡例を紹介します。

	気をつけて読んでいただきたい内容です。
	本文中の補足説明
	本文中のヒントとなる説明
注	本文中につけた注の説明
—	Linux版のインストール画面の説明では、__部分(下線部分)はキーボードからの入力を示します。

4. 関連マニュアル

Job Director に関するマニュアルです。Job Director メディア内に格納されています。

資料名	概要
Job Director インストールガイド	Job Directorを新規にインストール、またはバージョンアップする場合の方法について説明しています。
Job Director クイックスタート編	初めてJob Directorをお使いになる方を対象に、Job Directorの基本的な機能と一通りの操作を説明しています。
Job Director 基本操作ガイド	Job Directorの基本機能、操作方法について説明しています。
Job Director 環境構築ガイド	Job Directorを利用するために必要な環境の構築、環境の移行や他製品との連携などの各種設定方法について説明しています。
Job Director NQS機能利用の手引き	Job Directorの基盤であるNQSの機能をJob Directorから利用する方法について説明しています。
Job Director 操作・実行ログ機能利用の手引き	Job Director CL/Winからの操作ログ、ジョブネットワーク実行ログ取得機能および設定方法について説明しています。
Job Director コマンドリファレンス	GUIと同様にジョブネットワークの投入、実行状況の参照などをコマンドラインから行うために、Job Directorで用意されているコマンドについて説明しています。
Job Director クラスタ機能利用の手引き	クラスタシステムでJob Directorを操作するための連携方法について説明しています。
Job Director Helper機能利用の手引き	Excelを用いたJob Directorの効率的な運用をサポートするJob Director JD Assist (定義情報のメンテナンス)、Job Director Report Helper (帳票作成)、Job Director Analysis Helper (性能分析)の3つの機能について説明しています。
Job Director Web機能利用の手引き	Webブラウザ上でジョブ監視を行うことができるJob Director CL/Webについて説明しています。
Job Director テキスト定義機能の利用手引き	Job Directorの定義情報をテキストファイルで定義する方法について説明しています。
Job Director クラスタ環境でのバージョンアップ・パッチ適用ガイド	クラスタ環境で運用しているJob Directorのアップデート、パッチ適用手順を説明しています。
Job Director 拡張カスタムジョブ部品利用の手引き	拡張カスタムジョブとして提供される各部品の利用方法について説明しています。
Job Director 運用・構築ガイド	Job Directorの設計、構築、開発、運用について横断的に説明しています。
Job Director 移行ガイド	運用中のJob Directorを別の新環境に移行する手順について横断的に説明しています。
Job Director R16.1 リリースメモ	バージョン固有の情報を記載しています。

5. 改版履歴

版数	変更日付	項目	形式	変更内容
1	2022/11/20	新規作成	—	第1版

目次

はじめに	iv
1. Job Director R16.1における制限事項	v
2. マニュアルの読み方	vii
3. 凡例	viii
4. 関連マニュアル	ix
5. 改版履歴	x
1. 概要	1
1.1. 機能範囲	2
2. Job Director クラスタ環境構築の概要	3
2.1. Job Directorのクラスタ環境での動作概要	4
2.1.1. サイト	4
2.1.2. クラスタ用のサイト作成	4
2.1.3. Job Directorサイトのフェイルオーバー時の動作概要	5
2.1.4. cjcpx	6
2.1.5. site.confでのサイト起動・停止制御 (Windows版のみ)	7
2.2. クラスタ環境構築前の事前準備	8
2.2.1. ユーザIDの統一	8
2.2.2. リロケータブルIPアドレスの有効化	8
2.2.3. 共有 (ミラー) ディスクへのアクセス	9
2.3. クラスタ環境構築手順 (Linux版)	10
2.3.1. クラスタソフトウェアのセットアップ (運用系・待機系)	10
2.3.2. 運用系、待機系へJob Directorをインストール (運用系・待機系)	10
2.3.3. サイトパラメータの決定 (運用系・待機系)	10
2.3.4. Job Directorの停止 (運用系・待機系)	10
2.3.5. Job Directorサイトデータベースの作成 (運用系)	10
2.3.6. サイトの設定 (運用系・待機系)	11
2.3.7. サイトの起動確認 (運用系・待機系)	12
2.3.8. クラスタソフトウェアへのサービス登録 (運用系・待機系)	13
2.3.9. クラスタの動作確認 (運用系・待機系)	13
2.4. クラスタ環境構築手順 (Windows版)	14
2.4.1. クラスタソフトウェアのセットアップ (運用系・待機系)	14
2.4.2. 運用系、待機系へJob Directorをインストール (運用系・待機系)	14
2.4.3. サイトパラメータの決定 (運用系・待機系)	14
2.4.4. Job Directorの停止 (運用系・待機系)	14
2.4.5. Job Directorサイトデータベースの作成 (運用系)	15
2.4.6. サイトの設定 (運用系・待機系)	16
2.4.7. サイトの起動確認	17
2.4.8. クラスタソフトウェアへのサービス登録 (運用系・待機系)	19
2.4.9. クラスタの動作確認 (運用系・待機系)	19
2.5. クラスタ環境でのジョブ実行環境構築、運用	20
2.5.1. CL/Winでクラスタサイトにログイン	20
2.5.2. 環境変数NQS_SITE	20
2.5.3. サイトの状態確認	21
2.5.4. フェイルオーバー時のジョブ実行継続設定	22
2.5.5. メンテナンスモードでのJob Directorの起動 (Linux版のみ)	23
2.6. Job Directorのクラスタ環境での注意事項	24
2.6.1. サイトデータベースの削除・再作成方法	24
2.6.2. サイトデータベースのバージョンアップ	25
2.6.3. その他の注意事項	27
3. CLUSTERPRO	29
4. Windows Server Failover Clustering (WSFC)	30
4.1. WSFCクラスタサービスの作成	31
4.1.1. Job Directorクラスタの役割作成	31
4.1.2. 利用する記憶域の選択	32

4.1.3. 利用するIPアドレスの選択	33
4.2. Job Directorのクラスタ環境構築	34
4.3. WSFCクラスタリソースの登録	35
4.3.1. クラスタサイトを「サービス起動」させる場合	35
4.3.2. クラスタサイトを「cjcpw起動」させる場合	37
4.4. WSFCクラスタの動作確認	40

表の一覧

2.1. サイトパラメータ例	10
2.2. サイトパラメータ例	14
4.1. Job Director サイトパラメータ	30

1. 概要

Job Directorのクラスタシステムにおける動作概要を示します。

1.1. 機能範囲

Job Directorでは、クラスタシステムにおいて通常のシングルサーバと同様に動作します。

フェイルオーバーグループに設定されているホスト名（仮想ホスト名）をサイト名として使用することにより、フェイルオーバー/フェイルバック時にCL/Win（クライアント）の接続先を手動で切り替えることなく、単一のJob Directorサーバ名で運用系/待機系を意識することなく接続できます。



ただしフェイルオーバー時にはサーバ側プロセスの再起動が行われますので、クラスタサイト側で保持するCL/Winの接続情報がクリアされます。

そのため、フェイルオーバー発生後はCL/Winの接続をいったん「切断」して、同じ接続先を指定して再接続することが必要になります。再接続せずそのままの場合、トラッカ表示やその他の操作が正常に行えませんので注意してください。

2. Job Director クラスタ環境構築の概要

Job Directorでのクラスタ環境の動作概要、クラスタ環境の構築手順を示します。

2.1. Job Directorのクラスタ環境での動作概要

Job Directorがクラスタ環境でどのような動作をするのかを説明します。

2.1.1. サイト

Job DirectorではサイトというJob Directorの実行環境を利用することにより、運用系サーバでの障害発生時にJob Director システムのフェイルオーバーが行われた場合でも、フェイルオーバー前に実行中であった業務を継続実行させることを可能にしています。

サイトは、以下の3種のパラメータによって一意に決まります。

■サイト名

ネットワーク上で、Job Directorのサイトを一意に区別するための名前（ホスト名）です。一般的なクラスタソフトウェアにおける仮想ホスト名に相当します。

Job Directorでは、このサイト名とIPアドレスの正引き、逆引きが可能な環境であることが必須となっています。

■マシンID

Job Directorの各サイトを一意に識別するためのIDです。ネットワーク上で一意である必要はありませんが、ジョブの転送等、ジョブ連携を行うマシン間では一意である必要があります。

■サイトデータベースのパス

Job Directorのジョブネットワークやスケジュール、キューの定義、ジョブの実行結果であるトラック等の情報を保存する領域です。

Job Directorのインストールを行うと、デフォルトでローカルサイトと呼ばれるサイトが作成されます。このローカルサイトのパラメータは次のとおりです。

■サイト名

インストールを行ったマシンのホスト名

■マシンID

インストール時に指定したマシンID

■サイトデータベースのパス

Windows版	<Job Directorインストールディレクトリ>\
Linux版	/usr/spool/nqs/

クラスタソフトウェアを用いない環境であれば上記のローカルサイトだけで運用を行うことは可能ですが、Job Director サイトをクラスタ化するためには、デフォルトのローカルサイトではなく、クラスタ用の新しいサイトを作成する必要があります。

このクラスタ用のサイトをローカルサイトと区別してクラスタサイトと呼びます。

また、ローカルサイトとクラスタサイトはジョブネットワークやトラック、キューの設定等も別々に管理され、起動、停止も独立して行うことができます。

2.1.2. クラスタ用のサイト作成

Job Director サイトをクラスタ化するためには、以下のようなパラメータのクラスタサイトを作成する必要があります。

■ サイト名

クラスタ環境を構築する各マシンに割り当てる仮想ホスト名

■ マシンID

すでに存在するJob Director連携環境内で重複しないマシンID

■ サイトデータベースのパス

クラスタ環境を構築する各マシンからアクセス可能な共有ディスク上のパス、またはクラスタ環境を構築する各マシンでミラーリングされたディスク領域上へのパス

このようにクラスタサイトを作成することで、運用系のマシンに障害が発生し、Job Directorが継続動作できない環境に陥るような状態になっても、待機系のマシンにインストールされたJob Directorの方でジョブの運用を継続動作させる環境が構築できます。

2.1.3. Job Directorサイトのフェイルオーバー時の動作概要

クラスタ化されたJob Directorのサイト環境で運用系サーバに障害が発生した場合に、どのようにして待機系に運用が引き継がれるかを説明します。

図2.1「クラスタ環境例」のような環境でJob Directorのクラスタサイトが作成されているものとします。図2.1「クラスタ環境例」は次のような環境です。

- 通常は運用系サーバでJob Directorを起動して動作させ、障害時には待機系でJob Directorを起動して業務を継続する運用・待機系のクラスタ構成
- 運用系、待機系でともに扱えるクラスタサイトを作成
- サイトデータベースは運用系サーバ、待機系サーバ双方からアクセス可能な共有ディスク内に存在

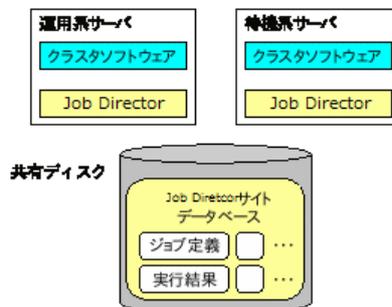


図2.1 クラスタ環境例

1. 通常は運用系サーバのJob Directorクラスタサイトでジョブ運用を行います。運用系サーバのJob Directorが起動、待機系サーバのJob Directorは停止しています。運用系サーバのJob Directorは共有ディスク上のサイトデータベースを使ってジョブ運用を行います。

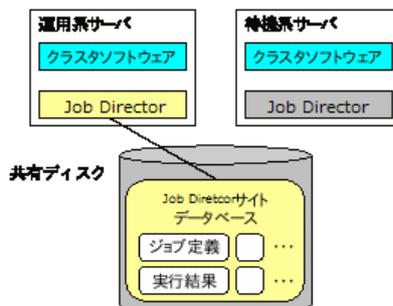


図2.2 クラスタ環境でのサイト動作図1

2. 運用系サーバで障害が発生し、運用系サーバのJob Directorが停止します。



図2.3 クラスタ環境でのサイト動作図2

3. 運用系サーバの障害をクラスタソフトウェアが検知し、待機系サーバでJob Directorを起動します。

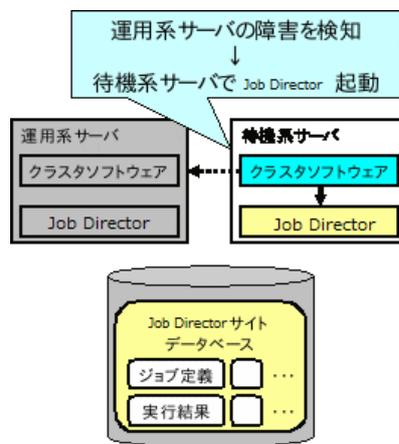


図2.4 クラスタ環境でのサイト動作図3

4. 待機系で起動したJob Directorは共有ディスク上のサイトデータベースを参照し、設定に応じてフェイルオーバー前に実行していたジョブの再実行を順次行って、ジョブの運用を継続します。

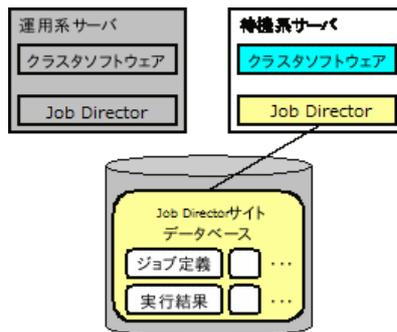


図2.5 クラスタ環境でのサイト動作図4

2.1.4. cjcpw

cjcpwはサイトの起動、停止を行うコマンドです。サイトの起動を行うとcjcpwは常駐プロセスとして起動し、Job Directorが動作するために必要なプロセスを順次起動して、起動した各プロセスを監視します。

Job Directorのプロセスがダウンする等の障害が発生した場合にはそれを検知し、監視しているほかのプロセスを停止させてサイトを停止します。(ただし-cオプション付きでcjcpwを起動した場合は、cjcpwは監視動作はしませんが終了します)

このcjcpwコマンドをクラスタソフトウェアのサービス開始、終了コマンドに記述し、cjcpwプロセスをクラスタソフトウェアに監視させることによって、Job Directorの障害をクラスタソフトウェアが検知し、待機系でJob Directorのサイトを起動させることが可能になります。

cjcpwが監視を行うJob Directorのプロセスは次のとおりです。

Linux	Windows
NQS nqsdaemon (親 PID が 1 のもの)	nqsdaemon.exe
NQS netdaemon (親 PID が NQS nqsdaemon のもの)	netdaemon.exe
NQSlogdaemon	logdaemon.exe
jnwengine	jnwengine.exe
jnwengine-qwb	qwb.exe
jnwengine-trkrdr	trkrdr.exe
jnwengine-spawn	—
sclaunchd	sclaunchd.exe
jnwcaster (2つ起動する内の親プロセスの方)	—
comagent	comagent.exe
jcdb	jcdb.exe
jnwlauncher	jnwlauncher.exe
jl_logmonitor	jl_logmonitor.exe
jl_submit	jl_submit.exe
jcwebserver	jcwebserver.exe



■jcwebserverについてはLinuxとWindowsのサイトでのみ存在します。また、daemon.confのjcwebserver_enabled/パラメータの設定がfalseのサイトの場合、jcwebserverはプロセスとして存在しません。

jcwebserver_enabled/パラメータの詳細については<環境構築ガイド>の「5.2 デーモン設定ファイルの使用可能パラメータ」を参照してください。

2.1.5. site.confでのサイト起動・停止制御 (Windows版のみ)

site.confによりサイトごとにJob Directorの起動・停止にかかる時間の制御を行うことができます。

site.confの詳細については<環境構築ガイド>の「5.6.3 サイト設定ファイル (site.conf) を作成する」を参照してください。

2.2. クラスタ環境構築前の事前準備

Job Directorのクラスタ環境を構築する前に確認が必要な項目について説明します。

2.2.1. ユーザIDの統一

Job Directorの単位ジョブはOSの各ユーザの実行権限で実行されます。各単位ジョブがどのユーザの権限で実行されるかは、ユーザ名ではなく、ユーザIDで決定されます。そのため、Job Directorのクラスタ環境を構築する場合、運用系・待機系でJob Directorの各ジョブ実行ユーザのユーザIDを統一する必要があります。

ユーザIDが運用系・待機系で統一されていないと、以下のような問題が発生し、正常動作ができなくなります。

■ユーザマッピング情報の不整合

Job Directorではジョブの転送を転送元でのジョブ実行ユーザのユーザIDと転送先でのジョブ実行ユーザのユーザIDのマッピング情報（ユーザマッピング）を利用して実現しています。このマッピング情報を利用して、ジョブの転送が行われたときに、転送先でどのジョブ実行ユーザの権限でジョブを実行するかを決定しています。

運用系・待機系でユーザIDが一致していない状況では、このユーザマッピング情報に不整合が発生することになり、ジョブを正常に転送できなくなります。

■フェイルオーバー前後でのユーザIDの不整合

運用系・待機系でユーザIDが一致していない環境でフェイルオーバーが発生すると、フェイルオーバー前後でジョブ実行ユーザのユーザIDが異なるため、ジョブを継続実行できなくなります。

ユーザIDが不一致の状況では上記のような問題が発生するため、Job Directorのクラスタ環境構築作業を行う前に、ジョブ実行ユーザとして利用する全てのユーザのユーザIDを運用系・待機系で統一してください。

ユーザIDの変更方法は次のとおりです。

■Linux環境のユーザIDの変更方法

OSのコマンドで変更可能です。詳細はmanページやOSのマニュアルを参照してください。

■Windows環境でのユーザIDの変更方法

Job Directorのサーバ環境設定でユーザIDの変更が可能です。詳細は<環境構築ガイド>の「12.4.1 ユーザのプロパティ」を参照してください。なお、本ユーザIDの変更はJob Directorが管理するユーザ情報のみ変更します。OSのユーザ情報そのものには何ら変更を加えるものではありません。

■Windows環境でのユーザIDの統一について

ドメイン環境の場合、ドメインユーザのuidはドメイン参加マシン間で一意に決まりますので、uidの統一を容易に行うことができます。そのため、クラスタ環境を構築する場合は、ドメイン環境で構築し、ドメインユーザによる運用を推奨しています。（この場合、Job Director 管理者もドメインユーザである必要があります）

2.2.2. リロケータブルIPアドレスの有効化

一般的なクラスタソフトウェアでは、運用系・待機系の両方で利用可能なリロケータブルIPアドレスを設定する必要があります。Job Directorのサイトを作成する際、リロケータブルIPアドレスに対応するホスト名をパラメータとして設定する必要があります。

そのため、Job Directorのクラスタ環境を構築する前に、リロケータブルIPアドレスが有効であることを確認してください。また、リロケータブルIPアドレスと対応するホスト名の正引き、逆引きが正しく行われることを確認してください。

リロケータブルIPアドレスの設定方法については、各OSのマニュアル等を参照してください。

2.2.3. 共有（ミラー）ディスクへのアクセス

前節で説明を行った通り、Job Directorは運用系・待機系の両方からアクセス可能なディスク領域上にサイトデータベースを作成し、そのサイトデータベースを利用することによって、フェイルオーバが発生してもジョブの継続実行が可能となる機能を提供しています。

サイトデータベースの作成を行う前に、サイトデータベースを作成するディスク領域がアクセス可能であることを確認してください。

2.3. クラスタ環境構築手順（Linux版）

Linux版でのクラスタ環境構築手順です。以下の手順でJob Directorのクラスタ環境を構築してください。

2.3.1. クラスタソフトウェアのセットアップ（運用系・待機系）

クラスタソフトウェアのセットアップ・構築手順については、利用するクラスタソフトウェアのマニュアルを参照してください。

2.3.2. 運用系、待機系へJob Directorをインストール（運用系・待機系）

運用系、待機系にJob Directorをインストールします。詳細は<インストールガイド>を参照してください。

2.3.3. サイトパラメータの決定（運用系・待機系）

Job Directorのサイトを作成するうえで必要なパラメータを決定します。必要なパラメータは次のとおりです。

■ サイト名

サイトが動作するリロケータブルIPアドレスに対応するホスト名です。ネットワーク上で、サイト名、リロケータブルIPアドレスの正引き、逆引きが可能な状態である必要があります。

■ マシンID

Job Directorの各サイトを一意に識別するためのIDです。ローカルサイト、クラスタサイトも別のサイトとして認識されるので、別のマシンIDを設定する必要があります。このIDはJob Directorの連携するシステム内で一意である必要があります。

■ Job Directorサイトデータベースのパス

サイト毎のジョブネットワーク定義やスケジュール、ジョブの実行結果が保存されるディスク領域です。

この節では、上記パラメータが以下のような場合を例として説明します。

表2.1 サイトパラメータ例

パラメータ	値
サイト名	testsite
マシンID	200
Job Directorサイトデータベースのパス	/mnt/jobdb

2.3.4. Job Directorの停止（運用系・待機系）

クラスタサイト構築を行う前に運用系、待機系のJob Directorローカルサイトを停止します。Job Directorローカルサイトの停止を行うためには以下のコマンドを実行します。

```
# /usr/lib/nqs/nqsstop <
```

2.3.5. Job Directorサイトデータベースの作成（運用系）

cjcmksiteコマンドを利用して、Job Directorサイトデータベースを作成します。cjcmksiteコマンドを実行する前に、以下の項目を確認してください。

■ 共有ディスクのマウントポイントが有効かどうか。

■ ローカルサイトのJob Directorが停止しているかどうか。

- サイト名に対応するリロケータブルIPアドレスが有効かどうか。
- 追加するサイトのDBパスが既存の他サイトのDBパスと重ならないかどうか。

cjcmksiteコマンドのフォーマットは次のとおりです。

```
/usr/lib/nqs/cluster/cjcmksite <サイト名> <マシンID> <Job Directorサイトデータベースのパス>
```

コマンドの実行例を示します。

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcmksite testsite 200 /mnt/jobdb <
```

本コマンドを実行して、次の例のように表示されればサイトデータベースの作成は成功です。

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcmksite testsite 200 /mnt/jobdb <
```

```
Phase 1: Make NQS spool directories.
:
:
cjcmksite Complete
(stop temporaty daemon)
```

サイトデータベースが作成されたことを確認します。サイトデータベースの作成ディレクトリに移動し、lsコマンドを実行して以下のディレクトリが作成されていることを確認してください。

```
# ls <
nqs
```

サイト名に対応するリロケータブルIPアドレスがそのマシン上で無効、またはアクセス可能ではない場合には、データベース作成は失敗します。サイト名はフルドメイン名を指定します。エイリアス名は指定できませんので注意してください。

SELinux有効環境の場合は、次の例のようにサイトデータベースのディレクトリおよびファイルのセキュリティコンテキストにjobcenter_exec_tラベルを付与してください。

```
# semanage fcontext -a -t jobcenter_exec_t "/mnt/jobdb(/.*)?" <
# restorecon -RF /mnt/jobdb <
```

エラーが発生した場合やサイトデータベースの再作成が必要になった場合には、「[2.6.1 サイトデータベースの削除・再作成方法](#)」を参照し、サイトデータベースの再作成を行ってください。

2.3.6. サイトの設定（運用系・待機系）

Job Directorのサイト環境共通の設定を行います。ここでは、以下の2種類の設定を行います。

■ ローカルサイトの起動設定

Job Directorを利用するサーバにクラスタサイトを作成すると、一つのサーバにローカルサイトとクラスタサイトの2種類の実行環境が存在することになります。ここでは、ローカルサイトをクラスタサイトと同時に起動できるように設定します。

設定は、ローカルサイト、クラスタサイト共通のサイト設定ファイルである「/usr/lib/nqs/rc/daemon.conf」を編集します。

ローカルサイトとクラスタサイトの共存の有無に応じて、以下のいずれかを設定してください。

- ローカルサイトをクラスタサイトと共存可能（同時起動可能）にする場合

```
local_daemon=SITE
```

- OS起動時にJob Directorローカルサイトを自動的に起動しない場合

```
local_daemon=OFF
```



本設定は、ローカルサイトが起動するタイミングで読み込まれます。ローカルサイト運用中に設定してもただちに有効にはなりませんので注意してください。

local_daemon パラメータの詳細については <NQS機能利用の手引き>の「7.3.4 パラメータ」を参照してください。

■ Job Directorの待ち受けIPアドレスの設定

複数のサイトが存在する環境では、一つのマシンで複数のIPアドレスを使って通信の待ち受けが行われます。そのため、ローカルサイト、クラスタサイトに待ち受けを行うIPアドレスを設定する必要があります。設定は以下のファイルに行います。

ローカルサイト	/usr/spool/nqs/daemon.conf
クラスタサイト	<サイトデータベースへのパス>/nqs/daemon.conf

以下に「192.168.1.100」で待ち受けを行う場合の設定例を示します。クラスタサイトの場合には、設定するIPアドレスはリロケータブルIPアドレスである必要があります。

```
ipaddress=192.168.1.100
```



ipaddressの設定方法の詳細については、<環境構築ガイド>の5章「Job Director起動時の設定を変更する」を参照してください。

2.3.7. サイトの起動確認（運用系・待機系）

サイトデータベースの作成が完了すると、サイトを起動できるようになります。クラスタソフトウェアのサービスとしてJob Directorを登録する前に、サイトが正しく起動できることを確認してください。

サイトの起動、停止はcjcpwコマンドを用いて行います。cjcpwコマンドのフォーマットは次のとおりです。cjcpwコマンドの詳細については、<コマンドリファレンス>の「4.2 cjcpw デーモンプロセスの起動と監視、停止」を参照してください。

■ サイトの起動

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcpw <サイト名> <サイトデータベースへのパス> ←
```

■ サイトの停止

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcpw -stop <サイト名> ←
```

サイトtestsiteを起動、停止する例を以下に示します。

■ サイトの起動例

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcpw testsite /mnt/jobdb ←
```

■ サイトの停止例

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcpw -stop testsite ←
```

サイトの起動が正常にできたかどうかは、cjcpwコマンドを実行してサイトを起動した後に以下の9種類のプロセスが存在するかどうかをpsコマンド等で確認してください。

/usr/lib/nqs/cluster/cjcpw
NQS nqsdaemon
/usr/lib/nqs/jnwcaster
/usr/lib/nqs/gui/bin/jnwengine
/usr/lib/nqs/gui/bin/sclaunchd
/usr/lib/nqs/combase/comagent
/usr/lib/nqs/gui/bin/jcdb
/usr/lib/nqs/gui/bin/jnwlauncher
/usr/lib/nqs/gui/bin/jcwebserver



■jnwcasterは2つ起動します。

■jcwebserverについてはLinuxのサイトでのみ存在します。また、daemon.confのjcwebserver_enabled/パラメータの設定がfalseのサイトの場合、jcwebserverはプロセスとして存在しません。

jcwebserver_enabled/パラメータの詳細については<環境構築ガイド>の「5.2 デーモン設定ファイルの使用可能パラメータ」を参照してください。

2.3.8. クラスタソフトウェアへのサービス登録（運用系・待機系）

サイトの起動、停止が正常に行えることを確認できたら、クラスタソフトウェアのサービスとしてJob Directorを登録します。この作業は各クラスタソフトウェアによって作業内容が異なります。利用するクラスタソフトウェアに応じて以下の章の内容を参考に作業してください。

CLUSTERPRO	3章 「CLUSTERPRO」
Windows Server Failover Clustering (WSFC)	4章 「Windows Server Failover Clustering(WSFC)」

2.3.9. クラスタの動作確認（運用系・待機系）

クラスタソフトウェアへのサービス登録が完了したら、利用するクラスタソフトウェアのマニュアル等を参考にしてフェイルオーバー等が正しく行えるかどうか動作を確認してください。

2.4. クラスタ環境構築手順（Windows版）

Windows版でのクラスタ環境構築手順です。以下の手順でJob Directorのクラスタ環境を構築してください。

2.4.1. クラスタソフトウェアのセットアップ（運用系・待機系）

クラスタソフトウェアのセットアップ・構築手順については、利用するクラスタソフトウェアのマニュアルを参照してください。

事前準備事項の「[2.2.3 共有（ミラー）ディスクへのアクセス](#)」を可能にするには、クラスタソフトウェアの機能が必要です。したがって、この段階で共有（ミラー）ディスクへのアクセスが可能となるまでセットアップしてください。WSFCでの設定方法は、[4章「Windows Server Failover Clustering\(WSFC\)」](#)も参考にしてください。

2.4.2. 運用系、待機系へJob Directorをインストール（運用系・待機系）

運用系、待機系にJob Directorをインストールします。詳細は<インストールガイド>を参照してください。

2.4.3. サイトパラメータの決定（運用系・待機系）

Job Directorのサイトを作成するうえで必要なパラメータを決定します。必要なパラメータは次のとおりです。

■サイト名

サイトが動作するリロケータブルIPアドレスに対応するホスト名です。ネットワーク上で、サイト名、リロケータブルIPアドレスの正引き、逆引きが可能な状態である必要があります。

■マシンID

Job Directorの各サイトを一意に識別するためのIDです。ローカルサイト、クラスタサイトも別のサイトとして認識されるので、別のマシンIDを設定する必要があります。このIDはJob Directorの連携するシステム内で一意である必要があります。

■Job Directorサイトデータベースのパス

サイト毎のジョブネットワーク定義やスケジュール、ジョブの実行結果が保存されるディスク領域です。

この節では、上記パラメータが以下のような場合を例として説明します。

表2.2 サイトパラメータ例

パラメータ	値
サイト名	testsite
マシンID	200
Job Directorサイトデータベースのパス	X:\Jobdb

2.4.4. Job Directorの停止（運用系・待機系）

クラスタサイト構築を行う前に運用系、待機系のJob Directorローカルサイトを停止します。Job Directorローカルサイトの停止は以下の手順で行います。

1. Job Directorのサーバの環境設定画面を開きます。
2. 左のツリーから「サイト」を選択し、サイト名が「(local)」の行を右クリックしたときのメニューから「停止」を選択します。

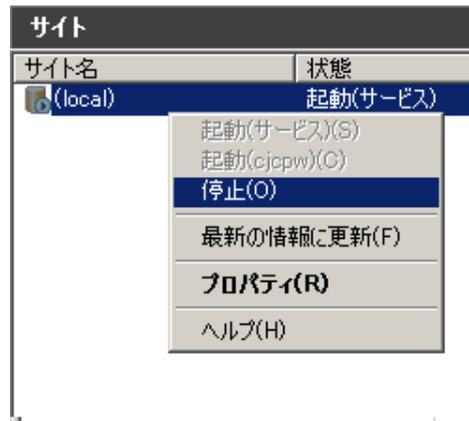


図2.6 ローカルサイト停止例

2.4.5. Job Directorサイトデータベースの作成（運用系）

サーバの環境設定画面でJob Directorサイトデータベースを作成します。コマンドを使ってサイトデータベースを構築したい場合は、<コマンドリファレンス>の「4.1 cjcmksite サイトを作成」を参照してください。

また、サイトデータベースの作成を行う前に以下の項目を確認してください。

- 共有ディスクのマウントポイントが有効かどうか。
- ローカルサイトのJob Directorが停止しているかどうか。
- サイト名に対応するリロケータブルIPアドレスが有効かどうか。
- 追加するサイトのDBパスが既存の他サイトのDBパスと重ならないかどうか。

以下の手順に従って、サイトデータベースを作成してください。

1. Job Directorのサーバの環境設定画面を開きます。
2. 左のツリーからサイトを選択した状態で、右ペインの空きスペースでコンテキストメニューを表示し、メニューから「サイトの追加」-「新規サイト」を選択します。



図2.7 新規サイトの作成メニュー

3. 作成するサイトのパラメータを設定し、OKボタンを押すとサイトが作成されます。

図2.8 サイトパラメータの設定画面例

4. サイトの作成が完了すると、サーバの環境設定の右ペインに作成されたサイトが表示されます。

サイト			
サイト名	状態	マシンID	DBパス
(local)	起動(サービス)	12345678	c:%Job Director%SV
testsite	停止	200	X%jobdb

図2.9 サイト作成後の確認画面

サイトデータベースの作成時にエラーが発生した場合やサイトデータベースの再作成が必要になった場合には、「[2.6.1 サイトデータベースの削除・再作成方法](#)」参照し、サイトデータベースを再作成してください。

2.4.6. サイトの設定（運用系・待機系）

Job Directorのサイトに関する設定を行います。以下の項目を参照して設定してください。

■ Job Directorの待ち受けIPアドレスの設定

複数のサイトが存在する環境では、一つのマシンで複数のIPアドレスを使って通信の待ち受けが行われます。そのため、ローカルサイト、クラスタサイトに待ち受けを行うIPアドレスを設定する必要があります。

設定は以下のファイルに行います。

ローカルサイト	<Job Directorインストールディレクトリ>\etc\daemon.conf
クラスタサイト	<サイトデータベースへのパス>\etc\daemon.conf

以下に、「192.168.1.100」で待ち受けを行う場合の設定例を示します。クラスタサイトの場合には、設定するIPアドレスはリロケータブルIPアドレスである必要があります。

```
ipaddress=192.168.1.100
```



ipaddressの設定方法の詳細については、<環境構築ガイド>の5章「Job Director起動時の設定を変更する」を参照してください。

■ site.confの設定

ローカルサイト、クラスタサイト毎に起動、停止に関するパラメータを設定できます。設定を行う場合は、以下のパスに設定ファイルを作成してください。デフォルト値で問題ない場合にはファイルを作成する必要はありません。

ローカルサイト	<Job Directorインストールディレクトリ>\etc\site.conf
---------	--

クラスタサイト	<サイトデータベースへのパス>\etc\site.conf
---------	-------------------------------

以下はsite.confの設定例です。設定値の詳細については<環境構築ガイド>の「5.6.3 サイト設定ファイル (site.conf) を作成する」を参照してください。

```
BOOT_TIMEOUT=200
STOP_TIMEOUT=300
FORCEKILL_TIME=5
```

2.4.7. サイトの起動確認

サイトデータベースの作成が完了するとクラスタサイトが起動できるようになります。クラスタソフトウェアへサービス登録する前に、サイトが正しく起動できることを確認してください。



- 起動確認後はサイトを停止させてください。Windowsの仕様により、環境設定画面からcjcpwを起動したままログオフすると、Job Director管理者ユーザで起動したcjcpwプロセスと当該プロセスから起動されたJob Directorの各プロセスが全て強制的に停止されます。
- クラスタサイトでLSAキューを利用する場合、クラスタソフトウェアでJob Directorをサービス起動する必要があるため、サービス起動の確認も行ってください。LSAキューの詳細については<NQS機能利用の手引き>の「6.1.3.8 LSAキュー属性」を参照してください。

2.4.7.1. サイトの起動確認（運用系）

サイトの起動、停止はサーバの環境設定画面で行います。（コマンドで行いたい場合は<コマンドリファレンス>の「4.2 cjcpw デーモンプロセスの起動と監視、停止」を参照してください）

1. サーバの環境設定画面で起動させたいサイトのコンテキストメニューから「起動 (cjcpw)」を選択します。



図2.10 サイトの起動か画面例

2. 起動に成功すると、状態例が「起動 (cjcpw)」になります。

サイト			
サイト名	状態	マシンID	DBパス
(local)	起動(サービス)	12345678	c:\%Job Director%\SV
testsite	起動(cjcpw)	200	%jobdb

図2.11 サイトの起動確認画面例

サイト			
サイト名	状態	マシンID	DB/パス
(local)	起動(サービス)	12345678	c:\Job Director\SV
testsite	起動(cjcpw)	200	%jobdb

図2.14 サイトの起動確認画面例

4. サービス起動の確認を行います。サイトを停止させた後、手順2.3の「起動 (cjcpw)」を「起動 (サービス)」に読み替えて実行してください。



クラスタソフトウェアでクラスタサイトをcjcpw起動させる場合、本手順は不要です。

2.4.8. クラスタソフトウェアへのサービス登録（運用系・待機系）

サイトの起動、停止が正常に行えることを確認できたら、クラスタソフトウェアのサービスとしてJob Directorを登録します。この作業は各クラスタソフトウェアによって作業内容が異なります。利用するクラスタソフトウェアに応じて以下の章の内容を参考に作業してください。

CLUSTERPRO	3章 「CLUSTERPRO」
WSFC	4章 「Windows Server Failover Clustering(WSFC)」



クラスタサイトでLSAキューを利用する場合、Job Directorをサービス起動する必要があります。Job Directorをクラスタソフトウェアのサービスとして登録する際、Job Directorクラスタサイトをサービス起動するように登録、制御してください。

2.4.9. クラスタの動作確認（運用系・待機系）

クラスタソフトウェアへのサービス登録が完了したら、利用するクラスタソフトウェアのマニュアル等を参考にして、フェイルオーバー等が正しく行えるかどうか動作確認を行ってください。

2.5. クラスタ環境でのジョブ実行環境構築、運用

ここでは、クラスタ環境でのジョブ実行環境構築作業や、運用にあたって注意すべきことを説明します。

2.5.1. CL/Winでクラスタサイトにログイン

クラスタサイトのジョブ実行環境を構築するために、作成したクラスタサイトにCL/Winでログインします。

CL/Winのログイン画面で、ログインするクラスタサイト名と、Job Director管理者ユーザ名（Linuxではnsumsmgr、Windowsではインストール時に指定した管理者名）、管理者のパスワードを入力してクラスタサイトにログインしてください。



図2.15 CL/Winでのログイン画面例

2.5.2. 環境変数NQS_SITE

クラスタサイトを作成すると、1つのホストにローカルサイトとクラスタサイトが同時に存在することになります。この状態でユーザがJob DirectorのコマンドやAPIを使用するとき、どのサイトを利用するかを明示的に指定する必要があります。

コマンドを実行する直前に環境変数NQS_SITEにサイト名を指定して、操作対象のサイトを指定します。

例えば、Linux環境においてサイトtestsiteのキュー一覧を参照する場合は、以下のように操作します（これは/bin/shを用いた場合の実行例です）。

```
# NQS_SITE=testsite ↵
# export NQS_SITE ↵
# /usr/bin/qstat ↵
```

（表示例）

```
guilb_def@testsite; type=PIPE; [ENABLED, INACTIVE]; pri=10
0 depart; 0 route; 0 queued; 0 wait; 0 hold; 0 arrive;
:
:
```

環境変数NQS_SITEに何も指定しなかった場合は、ローカルサイトを利用します。NQS_SITEにそのマシンのホスト名を指定した場合も同じ動作になります。以下はLinux環境でローカルサイトが正しく動作していた場合に、ローカルサイトのキュー一覧を参照している例です。

```
# unset NQS_SITE ↵
```

```
# /usr/bin/qstat <
guilb_def@localhost; type=PIPE; [ENABLED, INACTIVE]; pri=10
0 depart; 0 route; 0 queued; 0 wait; 0 hold; 0 arrive;
:
:
```

環境変数NQS_SITEに誤ったサイト名や、そのマシンに存在しないサイト名を指定した場合は、コマンド実行後、エラーメッセージが出力されます（エラーメッセージはコマンドによって異なります）。以下は誤ったサイト名を指定している状態でキュー一覧参照しようとした場合のエラーメッセージ例です。

```
Qstat(FATAL): Unable to setup NQS rootdir
```



本章で紹介している以下のコマンドは実行時に環境変数NQS_SITEを事前に設定する必要はありません。環境変数NQS_SITEの事前設定が必要なコマンドについては<コマンドリファレンス>の1章「コマンド一覧」を参照してください。

- cjcls（サイトの一覧と状態を表示）
- cjcmksite（サイトデータベースの作成）
- cjcpw（サイトの起動、停止）
- nqsstart（サイトの起動）
- nqsstop（サイトの停止）

2.5.3. サイトの状態確認

ローカルサイトやクラスタサイトの状態を確認する方法を示します。Windows版とLinux版で確認方法が異なります。

2.5.3.1. Linux版の場合

cjclsコマンドを利用してサイトの起動、停止状態を確認できます。

以下に実行例を示します。cjclsコマンドの詳細については<コマンドリファレンス>の「4.3 cjcls コマンドを実行したマシン上で稼動しているサイトの一覧を表示」を参照してください。

```
# /usr/lib/nqs/cluster/cjcls <
-----
SITE-NAME          DAEMON-PID      DB-PATH(LINK)          CJCPW
-----
testsite           1320            /mnt/jobdb             ON
                  (/usr/spool/nqs/0AC0120A)
othersite          SHUT            /mnt/other-jobdb      OFF
                  (/usr/spool/nqs/0AC0120B)
-----
```

2.5.3.2. Windows版の場合

サーバの環境設定画面でサイトの起動、停止状態を確認できます。また、Linux版と同様、cjclsコマンドでも確認できます。

Windows版のcjclsコマンドの詳細については<コマンドリファレンス>の「4.3 cjcls コマンドを実行したマシン上で稼動しているサイトの一覧を表示」を参照してください。

2.5.4. フェイルオーバー時のジョブ実行継続設定

ジョブ実行中に何らかの障害が発生し、Job Directorのフェイルオーバーが行われた場合、フェイルオーバー前に実行中であったジョブをフェイルオーバー後に再実行させるかどうかの設定を行うことができます。

フェイルオーバー後にジョブが再実行されるかどうかは、以下の2つのパラメータの組み合わせで決定されます。

■ Job Director停止時にジョブが投入されていたキューの再起動属性の設定

■ 単位ジョブパラメータ「その他」タブの「リスタート」の設定

キューの再起動属性については、「RESTART」「PURGE」「STOP」「MIGRATION_PURGE」「MIGRATION_STOP」があり、単位ジョブの「リスタート」設定については、「ENABLE」「DISABLE」があります。

ここではキューの再起動属性が「RESTART」「PURGE」の場合を例にして、キューの再起動属性と単位ジョブのリスタート設定がフェイルオーバー後のジョブの再実行にどのように影響するかを説明します。

キューの再起動属性の詳細については<NQS機能利用の手引き>の「6.1 キュー構成管理」、単位ジョブパラメータ「その他」タブの「リスタート」設定の詳細については<基本操作ガイド>の「4.2.2.5 [その他]タブ」を参照してください。

上記パラメータとフェイルオーバー後のジョブの再実行について、以下のようにパラメータが設定されたケース1～ケース3の図を例にして説明します。

	キューの再起動属性	単位ジョブのリスタート設定
ケース1	RESTART	ENABLE
ケース2	RESTART	DISABLE
ケース3	PURGE	ENABLE

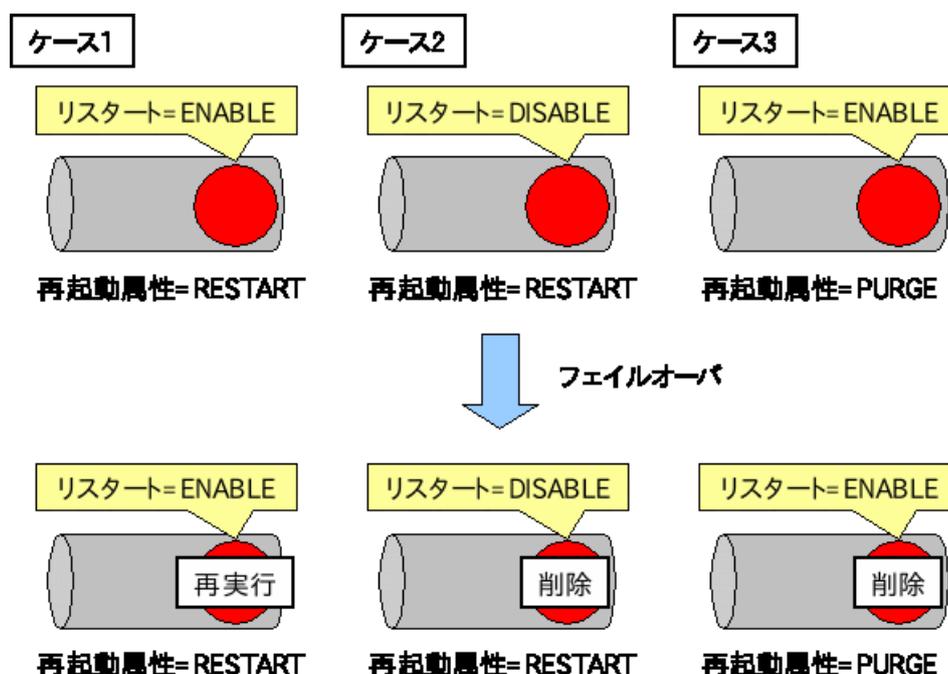


図2.16 フェイルオーバー後のジョブの動作例

キューの再起動属性がRESTARTの場合、そのキューに投入されたジョブはデフォルトではフェイルオーバー後、再実行されます（ケース1）。

明示的にリスタート設定を「DISABLE」に設定していた場合はジョブの設定に従い、フェイルオーバー後にはジョブは削除され、再実行されないこととなります（ケース2）。

キューの再起動属性がPURGEの場合は、そのキューに投入されたジョブはジョブの設定に関わらずフェイルオーバー後には全て削除され、再実行されません（ケース3）。



フェイルオーバー後、ジョブを再実行する機能を有効に利用するためには、ジョブ自身が再実行可能であることが必要です。ジョブとして実行されるスクリプトやプログラムは全てのタイミングで再実行可能であるように設計する必要があります。

2.5.5. メンテナンスモードでのJob Directorの起動（Linux版のみ）

クラスタソフトウェアのサービスとしてJob Directorの起動を登録している場合、「Job Directorの起動、停止」と「クラスタソフトウェアのサービスの起動、停止」がリンクしているため、共有ディスクに存在するサイトデータベースのメンテナンス作業が困難な場合があります。

クラスタソフトウェアのサービスの起動中にJob Directorのプロセスのみを停止してメンテナンスを行う必要がある場合は、以下の2種類の方法のうちどちらかを利用してください。

■nqsstart、nqsstopコマンド

クラスタソフトウェアのサービスとして起動中のクラスタサイトに関して、cjcpw以外のプロセスを起動、停止させることができます。この方法を利用してJob Directorの起動、停止を行った場合、クラスタソフトウェアに登録しているcjcpwプロセスは影響を受けないので、クラスタソフトウェアに影響を与えずにJob Directorの起動、停止を行うことができます。

サイト名がtestsiteであるクラスタサイトをnqsstart、nqsstopコマンドを用いて起動、停止する例を以下に示します。

■ サイトの起動

```
# /usr/lib/nqs/nqsstart testsite <|
```

■ サイトの停止

```
# /usr/lib/nqs/nqsstop testsite <|
```

■maintenanceオプション

サイトを起動するときに、cjcpwプロセスのみを起動し、Job Directorのプロセスを起動しないようにすることが可能です。つまりクラスタソフトウェアの設定を変更することなく、クラスタサイトのみ運用を停止できます。

このオプションを有効にするためには、「/usr/lib/nqs/rc/daemon.conf」に以下の設定を追加します。

```
maintenance=ON
```

上記設定を行った後、cjcpwコマンドでサイトの起動を行うと、cjcpwプロセスのみが起動します。



この節で紹介している方法は、クラスタソフトウェアでcjcpwのみを監視対象プロセスとしている場合に有効な方法です。Job Directorの各プロセスを直接監視している場合はこの方法は利用できません。

その場合は、クラスタサービスを一度停止する必要があります。

2.6. Job Directorのクラスタ環境での注意事項

Job Directorのクラスタ環境構築、運用を行う際の注意事項を示します。

2.6.1. サイトデータベースの削除・再作成方法

クラスタサイトの作成中にサイトデータベースの作成に失敗した場合は、以下の手順に従ってサイトデータベースを削除してから再作成してください。

■Linux版の場合

1. ローカルサイトの停止

ローカルサイトが起動している場合は以下のコマンドを実行してローカルサイトを停止させてください。

```
# /usr/lib/nqs/nqsstop <l
```

2. サイトデータベースへのシンボリックリンクの削除

以下のパスに存在するクラスタサイトのサイトデータベースへのシンボリックリンクを削除してください。

```
/usr/spool/nqs/<サイト名に対応するシンボリックリンク名>
```

<サイト名に対応するシンボリックリンク名>は、サイト名に対応するIPアドレスに応じて以下のように読み替えてください。

IPアドレスのバージョン	シンボリックリンク名
IPv4	IPアドレスを16進表記にした文字列
IPv6	「:」を除いたIPv6アドレス（16進表記）



サイト名がIPv4アドレス、およびIPv6アドレスの両方で名前解決が可能な場合、シンボリックリンク名はIPv4アドレスを優先して作成します。

3. サイトデータベースの削除

cjcmksiteで作成したサイトデータベースのパス配下のファイル・ディレクトリを全て削除してください。

4. サイトデータベースの再作成

cjcmksiteコマンドを改めて実行し、サイトデータベースを作成し直してください。



daemon.confのローカルサイトの起動設定（local_daemon=SITE または local_daemon=OFF）を行ってからローカルサイトを再起動したか、よく確認してからサイトデータベースの再作成を実行してください。

■Windows版の場合

1. 削除するサイトの選択

サーバの環境設定で、削除したいサイトを選択し、コンテキストメニューから「削除」を選択します。



図2.17 サイトの削除画面例

2. サイトの削除形式の選択

「クリア」（サイトデータベースを残しサイトの情報だけを削除する）か、「削除」（サイトデータベースのフォルダとサイトの情報の両方を削除する）かを選択するダイアログが表示されます。

ここではサイトデータベースごと削除するので「削除」を選択します。



図2.18 サイトの削除方法の選択画面

3. サイトデータベースの再作成

「[2.4 クラスタ環境構築手順（Windows版）](#)」を参照し、サイトデータベースを作成し直してください。

2.6.2. サイトデータベースのバージョンアップ

Job Director R13.2より、Job Directorのサイトデータベース内のファイル格納パスが変更になっています。

R12.10からアップグレードを行いサイトデータベースを再利用する場合は、以下の手順に従ってサイトデータベースをバージョンアップしてください。

2.6.2.1. サイトデータベースのバージョンアップ（Windows版）

1. 既存サイトの追加

サーバの環境設定画面で、左のツリーからサイトを選択している状態で、右ペインのコンテキストメニューから「サイトの追加」-「既存サイト」を選択します。



図2.19 既存サイトの追加画面例

2. サイトデータベースの場所を選択

エクスプローラから、サイトデータベースが存在する場所を選択します。

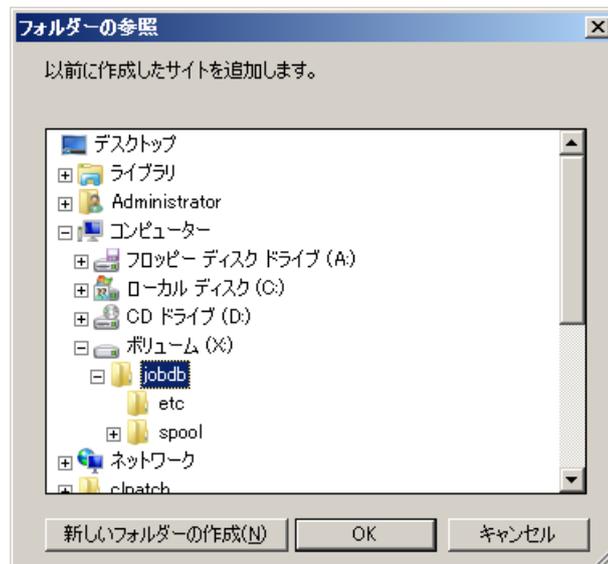


図2.20 サイトデータベースの追加画面

3. R12.10で作成されたサイトDBを選択した場合、アップグレード確認ダイアログが表示されます。「はい」を選ぶとバージョンアップ処理が開始されます。

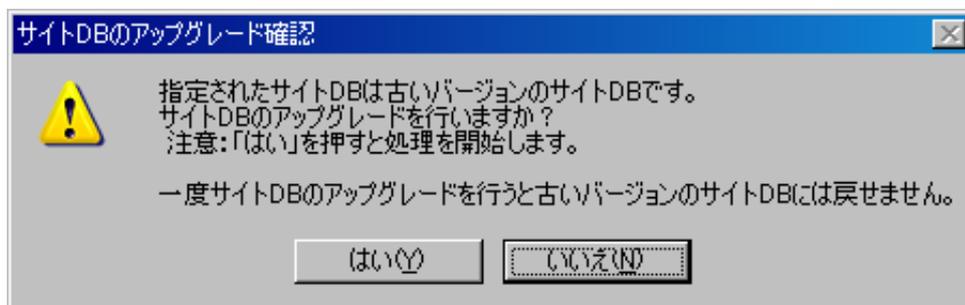


図2.21 サイトデータベースの追加画面

4. サイトの起動確認

追加したサイトが右ペインに表示されたら、サイトを起動し、正しくバージョンアップできたことを確認してください。

2.6.2.2. サイトデータベースのバージョンアップ (Linux版)

Linux版では、spoolconv コマンドを使用してサイトデータベースのバージョンアップを行います。spoolconv コマンドの詳細については<コマンドリファレンス>の「3.23 spoolconv R12.10のユーザ定義情報を移行」を参照してください。

サイト名がtestsiteであるクラスタサイトのサイトデータベースをバージョンアップするコマンド例を示します。

※/mnt/jobdbが旧バージョンのspool領域になっている例です

```
# export NQS_SITE=testsite
# /usr/lib/nqs/gui/bin/spoolconv -c /mnt/jobdb <
Do you convert the spool directory for SITE [testsite] <
[y/n](default: n) y?
Could not connect to Redis at /usr/spool/nqs/C0A81A0A/database/.jcdbs.sock: No such file or
directory
start jcdbs temporarity.
start convert spool directory.
:
:
:
end convert spool directory.
temporary jcdbs is stoped.
```



- コマンド実行後に、バージョンアップを行う対象のサイト名が表示されます。誤ったサイト名が指定されていない事の確認の上実行してください。
- バージョンアップ前のユーザ定義について変更・削除は行われません。バージョンアップ完了後、動作を確認した上で必要であれば削除を行ってください。

2.6.3. その他の注意事項

■ サイト複数起動時の消費資源について

例えば、同一マシン上でサイトが2つ起動された場合、サイト1つのときに比べて消費資源は2倍になることに留意してください。また、同時に全体の処理速度も遅くなることに留意してください。

サイトを複数起動する可能性がある場合には、事前に各消費資源の上限値を拡大しておくようにしてください。

■ 障害時にまれに発生する事象について

マシンの電源断などの障害発生時には、CPUのキャッシュの内容がJob Directorのトラッカやサイトデータベースは以下のファイルに正常に書き込まれず、結果としてJob Directorに必要なファイルが破壊される可能性があります。

このような障害が発生してジョブがエラーになった場合、手動でジョブを再実行する必要があります。

■ サイトデータベースのパーミッションについて

サイトデータベースには「755」のアクセス権が必要になります。

cjcmksiteコマンドを実行する前に、umaskの値を確認し、755のアクセス権がマスクされないように注意してください。

■クラスタソフトウェアのサービスの停止時に共有ディスクへアクセス中のプロセスが存在した場合の挙動について

クラスタソフトウェアのサービスの停止時に共有ディスクにアクセスしているプロセスが存在した場合、クラスタソフトウェアが正しくディスクをアンマウントできない場合があります。

一部のクラスタソフトウェアでは、サービス停止時に自動的にディスクにアクセスしているプロセスを終了させないため、ユーザはディスクにアクセスを行うプロセスを明示的に管理する必要があります。

通常、Job Directorから起動されたプロセスはJob Director停止の際、自動的にJob Directorからシグナルを受けるため、Job Directorが終了した時点でJob Directorから起動されたプロセスも終了しているのが一般的ですが、Job Directorからnqsbg等を利用して意図的にバックグラウンドプロセスを起動した場合、それらのプロセスをJob Directorから終了させる方法はありません。

そのような形で起動されたプロセスは、別途何らかの方法（fuser -k等）でサービス停止時に自動的に終了するように設計を行う必要があります。

■以下の警告メッセージがセットアップログ内に表示された場合、該当ユーザの[デフォルトパラメータ]-[イベント受信部品]のホスト名、イベントIDは引き継がれません。対処方法としては、該当ユーザごとにCL/Winで接続した後にデフォルトパラメータを設定してください。

```
Warning : Convert Skip ([DefaultParameter]EventReceive user="ユーザ名" hostname="デフォルトパラメータで指定しているホスト名" eventid="デフォルトパラメータで指定しているイベントID")
```

3. CLUSTERPRO

NEC製のクラスタソフトウェア「CLUSTERPRO」を使ったクラスタ環境構築手順については、CLUSTERPRO X が提供するJobCenterとの連携マニュアルを参照してください。

またその際は、JobCenterをJob Directorと読み替えてご参照ください。

■CLUSTERPRO X ソフトウェア構築ガイド

<https://jpn.nec.com/clusterpro/clpx/guide.html>

■ Windows

[Windows]－[JobCenter]－[JobCenter (第X版) /CLUSTERPRO X 4.1以降]

[Windows]－[JobCenter]－[JobCenter (第X版) /CLUSTERPRO X 4.0以前]

■ Linux

[Linux]－[JobCenter]－[JobCenter (第X版) /CLUSTERPRO X 4.1以降]

[Linux]－[JobCenter]－[JobCenter (第X版) /CLUSTERPRO X 4.0以前]

4. Windows Server Failover Clustering(WSFC)

ここでは、Microsoft社製のクラスタソフトウェア「Windows Server Failover Clustering(WSFC)」を使ったクラスタ環境構築例について説明します。

Job Directorのサイトパラメータが次のとおりであるとして、WSFCへJob Directorをサービス登録する手順を説明します。

表4.1 Job Director サイトパラメータ

パラメータ	値
サイト名	jcgpkg
サイト名に対応するIPアドレス	192.168.50.194
サイトデータベースパス	Y:\Jobdb
Job Directorインストールディレクトリ	C:\Job Director\SV

4.1. WSFCクラスタサービスの作成

以下の手順に従って、WSFCクラスタサービスを作成してください。（事前準備で作成済みの場合は、本手順は省略可能です。）

4.1.1. Job Directorクラスタの役割作成

「フェールオーバークラスターマネージャー」画面左のツリーにある「役割」を右クリックして、「空の役割の作成」を選択してください。役割の状態が「実行中」で作成された場合は、右クリックして「役割の停止」を選択し、役割の状態を停止にしてください。

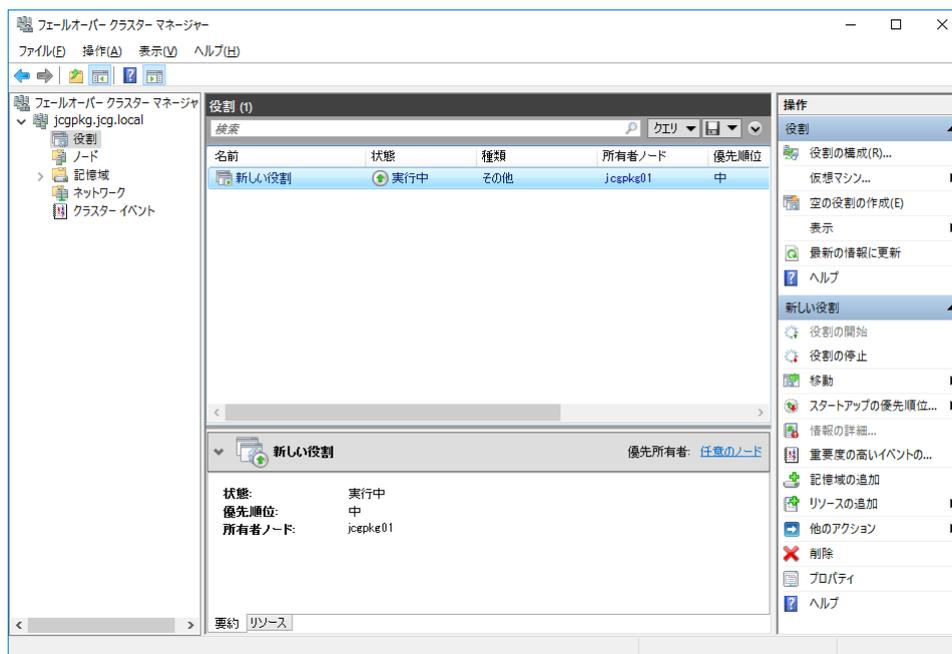


図4.1 フェールオーバークラスタ管理画面例

作成された「新しい役割」を右クリックしてプロパティを選択し、管理しやすい名前に変更します。変更例では「Job DirectorCluster」に変更しています。

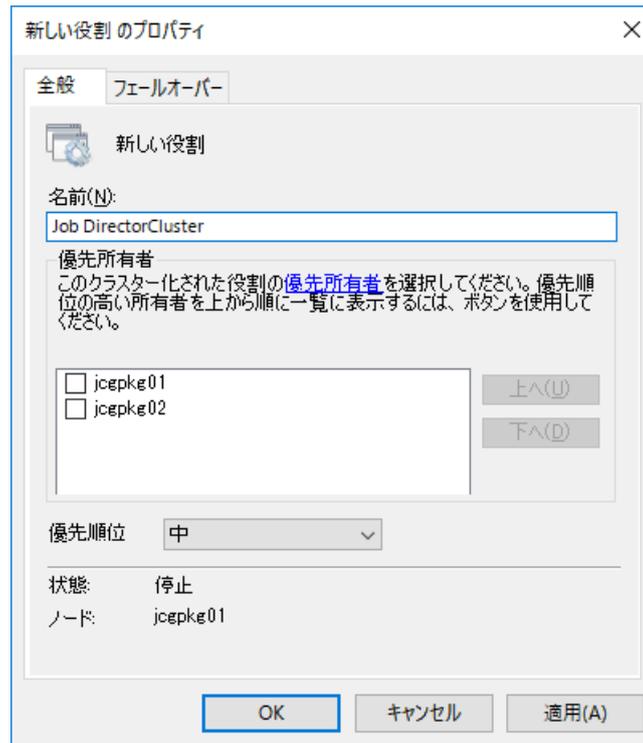


図4.2 役割の名前変更例

4.1.2. 利用する記憶域の選択

役割の右クリックメニュー「記憶域の追加」を選択してください。「記憶域の追加」画面では、表示されたクラスタディスクの中からサイトデータベースが含まれるものを選択します。

以下の例のようにサイトデータベースが含まれるディスクにチェックを入れ、「OK」をクリックしてください。

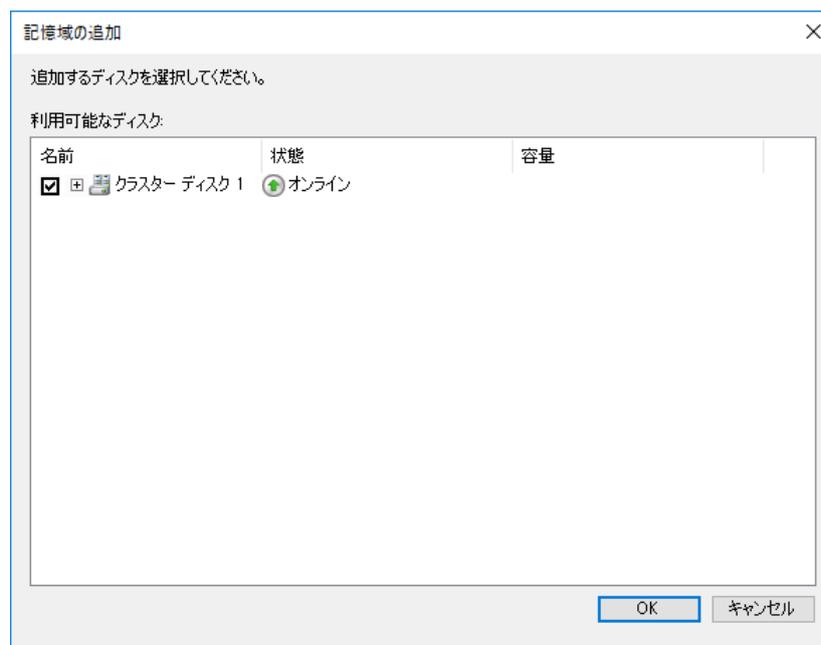


図4.3 記憶域の追加画面例

4.1.3. 利用するIPアドレスの選択

役割の右クリックメニュー「リソースの追加」から「その他のリソース」> 「IP アドレス」を選択してください。

「フェールオーバークラスターマネージャー」画面下にある「IP アドレス」を右クリックしてプロパティを選択し、IPアドレスを設定します。設定するIPアドレスは、サイト名に対応するリローケータブルIPアドレスを指定してください。

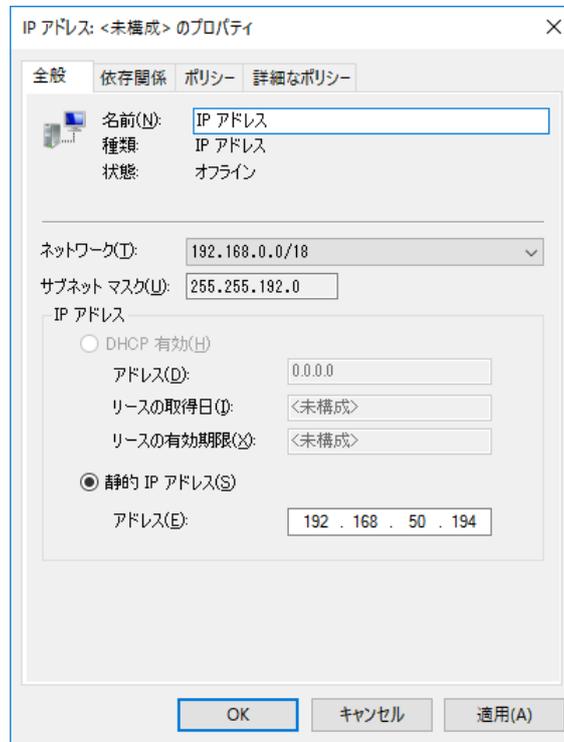


図4.4 IP アドレスの追加画面例

また、このリローケータブルIPアドレスとホスト名を結びつけるように、運用系・待機系両方のresolv.defファイルにホスト名のFQDNとショートネーム両方を記載してください。

resolv.def 設定例

192.168.50.194	jcgpkg.domain.jp	jcgpkg
----------------	------------------	--------

resolv.def 設定の詳細に関しては、<環境構築ガイド>の「2.3.2 resolv.defを利用した名前解決」を参照してください。

4.2. Job Directorのクラスタ環境構築

クラスタサービスの作成が完了したら、Job Directorのクラスタ環境の構築を行います。「[2.4 クラスタ環境構築手順 \(Windows版\)](#)」の「[2.4.2 運用系、待機系へJob Directorをインストール \(運用系・待機系\)](#)」から「[2.4.7 サイトの起動確認](#)」まで実施してください。(既に実施済みの手順は省略可能です)

4.3. WSFCクラスタリソースの登録

クラスタサービスの作成およびJob Directorのクラスタ環境の構築が完了したら、次の手順に従ってJob Directorクラスタリソースを登録してください。

Job Directorのクラスタサイトを「サービス起動」させる場合と「cjcpcw起動」させる場合で登録するリソースが異なります。それぞれの場合における手順に分けて説明します。

4.3.1. クラスタサイトを「サービス起動」させる場合

4.3.1.1. Job Directorのクラスタサイトのサービス登録

役割の右クリックメニュー「リソースの追加」から汎用サービスの追加を実行します。追加するサービスは、「Job Director Service(<Job Directorのクラスタサイト名>)」を指定してください。



Job Directorのクラスタサイトを一度「サービス起動」していない場合は一覧に表示されません。「2.4.7 サイトの起動確認」を参考に、「cjcpcw起動」および「サービス起動」での起動確認を実施してください。

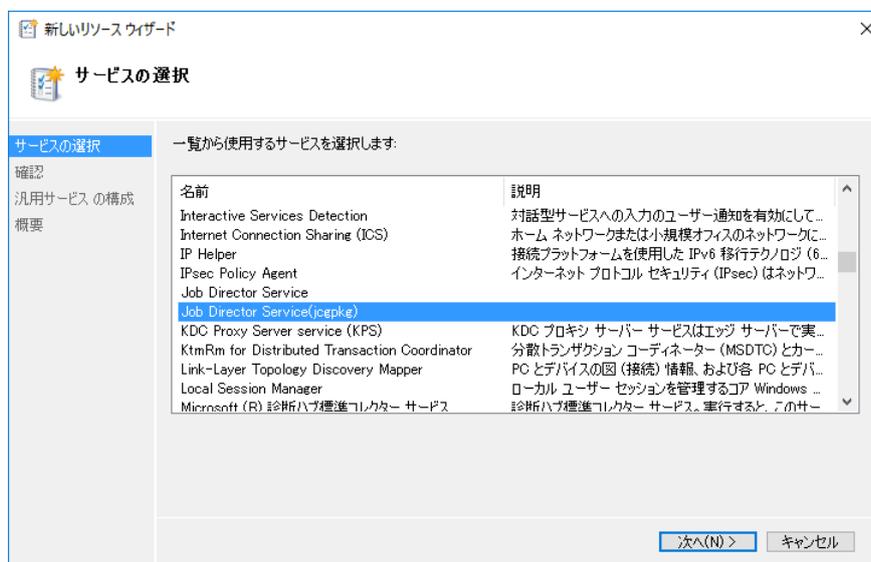


図4.5 汎用サービスのリソース追加例

4.3.1.2. 依存関係の設定

画面左のツリーより、「役割」をクリックし、画面下部の「リソース」タブを選択します。

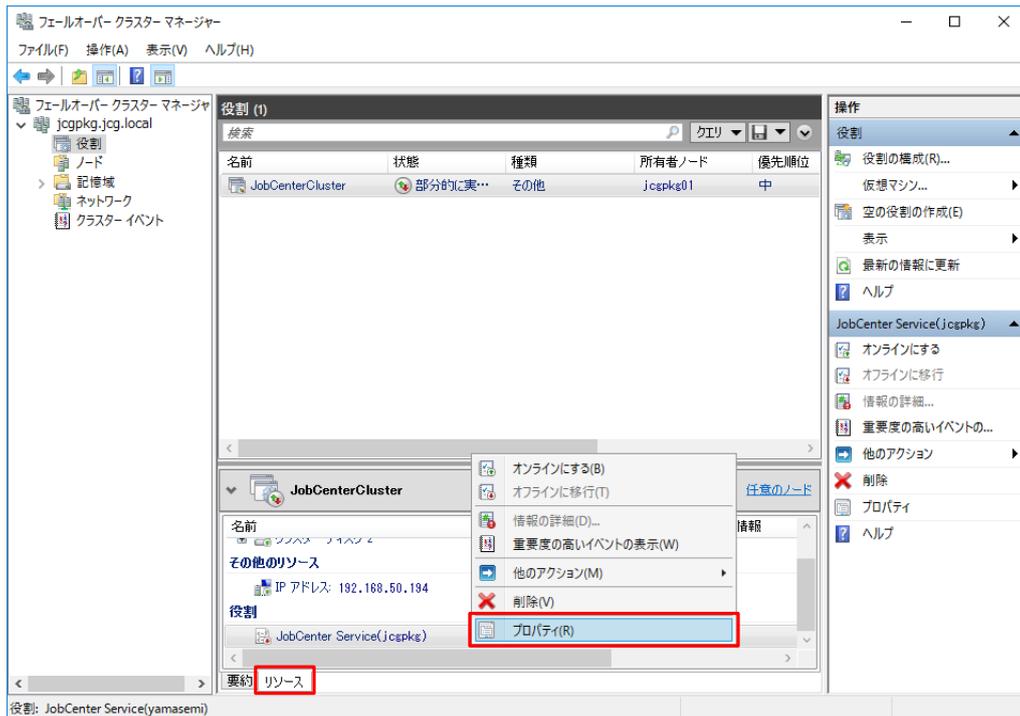


図4.6 クラスタサービスの概要画面例

リソース「汎用サービス」のプロパティを選択してください。プロパティ画面の「依存関係」タブをクリックし、リソース間の依存関係を設定します。

Job Director サイトが起動するためには共有ディスクがマウントされていて、かつ仮想IPアドレスが有効である必要があります。そのため、ここでクラスタディスクリソースとIPアドレスを依存関係に追加します。

例のように、クラスタディスクとIPアドレスとをAND条件で結ぶようにしてください。

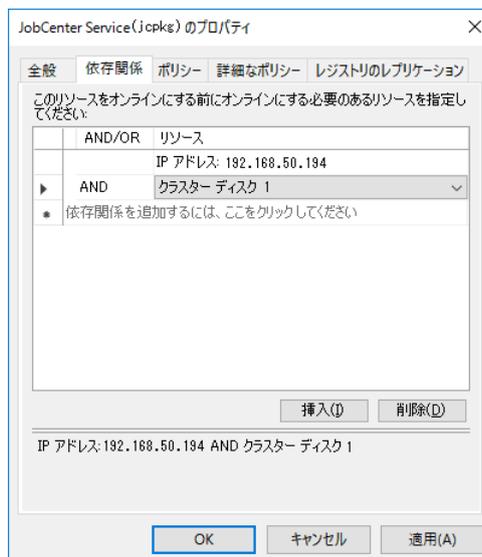


図4.7 依存関係設定画面例

4.3.2. クラスタサイトを「cjcpw起動」させる場合

4.3.2.1. Job Directorクラスタ起動スクリプトの配置

共有ディスクとして使用する領域に、Job Directorクラスタ管理を行う汎用スクリプト「JobCenterCluster.vbs」を配置して下さい。「JobCenterCluster.vbs」は、Job Directorインストールディレクトリ配下のsetupディレクトリに格納されています。

4.3.2.2. Job Directorクラスタ起動スクリプトの登録

役割の右クリックメニュー「リソースの追加」から汎用スクリプトの追加を実行します。追加する汎用スクリプトのパスは、「4.3.2.1 Job Directorクラスタ起動スクリプトの配置」で配置した、共有ディスク上のパスを指定してください。

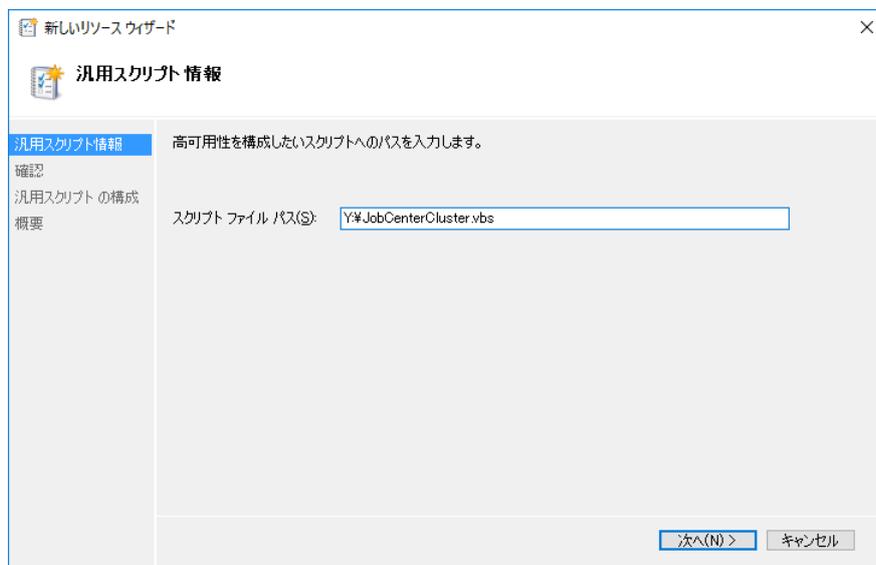


図4.8 汎用スクリプトのリソース追加例

「フェールオーバークラスターマネージャー」画面下にある「役割」を右クリックしてプロパティを選択し、管理しやすい名前に変更します。設定画面例では「ControlScript」に変更しています。



図4.9 汎用スクリプトの名前変更例

4.3.2.3. Job Directorクラスタ起動スクリプトの登録の確認

Windows PowerShell を開き、「Get-ClusterResource」の実行結果に「Job DirectorCluster スクリプト」が追加されている事を確認してください。

コマンドの実行例を示します。

```
PS C:\Users\Administrator.JCG> Get-ClusterResource<
Name                State      OwnerGroup ResourceType
----                -
ControlScript      Offline   Job DirectorCluster  Generic Script
```

4.3.2.4. 依存関係の設定

クラスタサイトを「サービス起動」させる場合の依存関係の設定と同様です。「4.3.1.2 依存関係の設定」を参考に、「汎用サービス」を「汎用スクリプト」に読み変えて設定してください。

4.3.2.5. クラスタリソースのパラメータ設定

クラスタリソースのパラメータを設定します。

Windows PowerShellから、クラスタサイトのサイト名および、サイトデータベースのパスを、クラスタリソースのパラメータに設定します。

ここでは、作成したクラスタサイトのサイト名を「SiteName」に、サイトデータベースのパスを「DBPath」に設定します。Windows PowerShellを起動し、以下のコマンドを実行します。



ディスクの状態がオンライン、かつ所有者ノードと同じマシンで実行してください。

■ クラスタサイトのサイト名設定例

```
PS C:\Users\Administrator.JCG> Get-ClusterGroup "Job DirectorCluster" | Get-ClusterResource  
ControlScript | Set-ClusterParameter SiteName "jcgpkg" ←
```

■ サイトデータベースのパス設定例

```
PS C:\Users\Administrator.JCG> Get-ClusterGroup "Job DirectorCluster" | Get-ClusterResource  
ControlScript | Set-ClusterParameter DBPath "Y:\Jobdb" ←
```

■ 設定結果の確認

```
PS C:\Users\Administrator.JCG> Get-ClusterGroup "Job DirectorCluster" | Get-ClusterResource  
ControlScript | Get-ClusterParameter ←
```

Object	Name	Value	Type
ControlScript	ScriptFilepath	Y:\JobCenterCluster.vbs	String
ControlScript	SiteName	jcgpkg	String
ControlScript	DBPath	Y:\Jobdb	String

設定結果を確認し、「ScriptFilepath」、「SiteName」、「DBPath」のパラメータが設定されていれば、Job Directorのクラスタ環境構築は終了です。



設定例では、表4.1「Job Director サイトパラメータ」で設定したパラメータに合わせたコマンドを実行しています。設定例中の各パラメータは、構築環境に合わせて指定してください。

4.4. WSFCクラスタの動作確認

以上でクラスタ環境の構築は完了です。フェールオーバ等が正しく行えるかどうか動作確認を行ってください。



デフォルトでは運用ノードに障害が発生した場合には待機系にフェールオーバせず、運用系で復旧を試みる設定になっています。運用の方法に従って、適切な設定に変更してください。

